**暴力と殺人の物語 2017 10 08**

**マタイ 21:33-46 スティンストラ牧師**

そんな事態になってしまったと聞いてからかなりの時間が経過したものの、私たちの証言することになった大混乱と大虐殺のすさまじい光景は、私たちのショックをはるかに超える。その爆発的な破壊力の結果として、私たちも体調を悪くし胸が苦しくなってしまう。心臓が鼓動している単なる人間の思考によって、ここまで他の人の心を心髄まで冷やしてしまうことができるのだろうか。いったいどんな狂気が、将来に夢あふれる愛すべき隣の家の少年を、殺人者と彼のひねくれた標的の間にたまたま立っていたがために、誤った怒りによる殺人の犠牲者にしてしまうのだろうか？　私たちは、突然で完全に思慮を欠いた致命的な暴力によって卒倒してしまい、何の罪もないのに亡くなった人を悼むほとんど流れない苦い涙とともに、深い苦悩について泣き叫ぼうにも声にならない状態に再び取り残されてしまう。

いや、ここで私はラスベガスの血まみれの大虐殺について話しているのではない、もちろんそれについて話すこともできるのだが。。。福音書が書かれた時代よりもっと進んだ時代であるはずの現代に起こっている出来事が、本日の福音書でイエスが話す事柄に関して、はっきりとした窓のようになっていることに偶然以上の何かを感じさせる。先週の日曜日にマンダレイベイホテルの32階からコンサート会場の無防備な観衆に雹のように降った弾丸は、確かに今日私が最初に述べた所感の状況にもあてはまってしまう。痛々しいことではあるが、私たちの生きる時代は聖書が書かれた時代からあまり進歩していないということを教えられる。礼拝後のドーナツとコーヒーの周りにただよう平穏は、市民レベルの安全な日常を保つための社会的とりきめを破ろうとする人々によって簡単に損なわれてしまう。私たちはとかく神のぶどう園は、主が語った話の中でユダヤ教指導者たちがイエスのことを憎む辛らつな態度を、農夫たちの残忍な行動で示したたとえほどには醜いものではないと思いがちだ。

たとえ話から私たちが学ぶことは、ラスベガスで起こったことと同じようにひどいことがたとえで話されており、神の世界の安全は私たち人間に委ねられるという一般的な見解に、強い疑問をいだくことだ。おそらくそれほどには驚くべきことではないが、ぶどう園を任せられたのに立ち上がってぶどう園の管理をやめる農夫たちは、ぶとう園を残忍な土地に変えてしまったのだ。彼等は堂々とぶどう園の主人との約束を無視し、年間の契約料に相当するぶどうを受け取るために派遣される人々を凶暴に袋だたきにする。ただの賃借人である身分を忘れ、彼等はぶどう園の土地を自分たちのものにしたいと思い、勝手に自分で作ったルールに従って生きる。彼等は自分たちが働いたがゆえにぶどう園を与えられたようなものだという理由によって、自分たちの冷酷な手段を正当化し地主の財産であるぶどう園があたかも自分たちに帰属するかのように、また自分たちの私有財産の利息を得たかのように、すべて自分たちのものとするのだ。

彼等が自分たちの獰猛な氾濫を加速し、さらに自分勝手もはなはだしい領域に進んでいくことによる損害は想像にも及ばないものになっていってしまう。ぶどう園の主人が派遣した人々に対して農夫たちが下した卑劣な行いを聞くとき、私たちは唖然としてしまう。そして私たちは怒る。われわれの直感は、こんな発狂した小作人たちは、即刻ぶどう園から追い出される刑罰を受けるべきだと思う。そもそも、このぶどう園は彼等のものではないのだ。そして彼等は言語道断な自分勝手な契約違反だけではなく、その身の毛もよだつような方法を選んで契約を破ったことに対して罪を負うのだ。彼等は人々に対して、また人類の品位に対して、犯した暴行に対する罰金を払わねばならないのだ。

しかし、次に何が起こるかを見るにつけ、私たちの衝撃はさらに大きくなる。凶暴で危険な状況に対処するために特別に訓練を受けた警官隊を送り込み、犯人をつまみだして逮捕するのではなく、信じられないくらいに慈悲深いぶどう園の主人は、凶暴で裏切りに満ちた農夫たちを説得して彼等が任された農園の管理に関する約束を守らせるために、自分の息子を遣わすのだ。彼は、次に起こる出来事が証明するようにやや単純すぎる考えをしているようで、凶悪犯たちでも適切にさえお願いされれば、素直にぶどうを渡してくれるとでも思っていたようだ。しかし、彼が護衛もなくつまり完全に無防備な状態で現れた時に、それは彼等に殺そうという衝動をかきたててしまうだけなのだ。彼が単に父親の受け取るべき権利を求めようなら、彼等の血への渇望は、ただぶどう園の主人の跡継ぎである一人息子を殺そうとする行動を起こすようにけしかける。

さて皆さんはどう思われるだろうか？　私たちはこの暴力と殺人の物語に正確にあらわされたような人間なのだろうか？　私たちが繰り返し耐えねばならない暴力・虐殺は、我々の本性がそもそも卑劣なものだということを示しているのだろうか？　これらの恐ろしい出来事を取り除くのに、なにか手助けになることで、わたしたちができることはいったい何なのだろうか？　天の神に近づいて人々がこの地球をもっと大切にするようになるため、もっとよい事をしたいとするなら、今朝の話の中で、どこに良き知らせを見出すことができるだろうか？

我々が目撃したことから学ぶなかで、現代の教会が従うべき二つの重要な事柄があるように私には思える。私たちを鈍感にしてしまうような残忍な行為が連続的に起こることは許してはならない。痛みと恐怖が我々が口を閉ざすように脅すことがあっても、私たちは自分の職業を念頭におき、日々の用事をしている中で、街頭にいる狂人によって銃で撃たれてしまうというトラウマに無感覚になってしまうことはできない。これまでに達したことがないような死者と怪我人の数が、私たちを大岩の下でむずむず動き出させ、銃撃事件がすっかりなくなる奇跡的な日が来るという可能性はある。しかし神のぶどう園の借用者としての我々の仕事は、どんな危険があろうが他者が必要としていることに応じようとすること。我々の行動は収穫を得るためで、その収穫とは癒され回復した人々によって認識されるもの。そして危険が過ぎ去るまではぜいたくな休暇をとるようなことはできない。信仰者として我々に呼びかけられていることは、暴力という非自然的な災害による犠牲者たちの気持ちを感じ、寛大な心を持って行動・反応することだ。土地の所有者は、我々がただ自分たちのためだけにこの土地に住んでいるのではなく、我々を超えたなにかのために敬意を払うよう、静かな哀願をもって我々に近づいている。彼はたった十分の一が彼に帰すべきものとして求める。決して不当な分け前を求めるのではなく、我々が収穫の90パーセントは労賃として、また互いに面倒を見合って、またそのほかの主に創られたもののためも十分な収穫をいただけることになる。

そして二番目に大切なことは希望を失わないこと。神の御国は我々のものではない、神に感謝せよ。神は「私たちに責任がある」という永続する社会通念から離れるように動いてくださる。その社会通念は我々がベストであると思う幻影であって、その幻を実行して良いと思っているのだが、ただこの世の地面の中に幻影が写されているだけである。神は私たちの間に、たとえその時が暴力と殺人の真っ最中でも、品位と徳への呼びかけを持って、そしてこの世に神が望むところの平安の終焉をもたらすという約束もいっしょに持って、何度も現れてくださる。これ以上のひどいことは無いと思える最悪な状況をなんども体験するが、私たちは決して絶望にひたる必要はない。主は私たちが自分たちで考えたからくりにはまっている状態のまま見捨てたりしない。主は彼のぶどう園の究極的な成功のために投資し続けており、その子において、私たち自身から我々が救われる手法をすでに見つけたことに、確信を持っている。　アーメン